

柿本人麻呂「舎人論」存疑

久保田 栄 一

はじめに

人麻呂を初めて舎人としたのは、賀茂真淵である。『萬葉考』において、「皇子の宮人」(2・一六七)の注で次のように、人麻呂舎人説を提唱した。

さて下の高市皇子尊の殯時此人よめる長哥、その外此人の様を集中にて見るに、春宮舎人にて此の時もよめるなるべし、然ればこゝはもはら大舎人の事をいふ也、

真淵は、日並皇子尊の挽歌(2・一六七〜一七〇)と高市皇子尊の挽歌(2・一九九〜二〇一)から帰納して、人麻呂は「春宮舎人にて此の時もよめるなるべし」と解したのである。しかし、両皇子の挽歌のどのような事実から帰納したのか、その根拠は示していない。

研究史を渉猟すると、昭和四〇年頃までは人麻呂舎人説が主流であったが、今日(注3)は必ずしもそうではない。そこで、仮

に人麻呂が舎人であったとするならば、両皇子の挽歌から、舎人と帰納できる確かな証を見つけない。その為に、両皇子の挽歌の解釈と諸皇子との関わりを検討し、人麻呂を舎人と帰納することができるのか否か、を考えていきたい。

一、感情表現について

日並・高市両皇子の挽歌で、人麻呂は自身の感情を詠っている、いや、詠っていないとの見方がある。土橋寛は、日並皇子挽歌での天武讚美は「単なる修辞や誇張ではなく、人麻呂の思想の表現」であるとの説である。「王は神にしませば天雲の」(2・二〇五)と持統を神と称えたことや挽歌での修辞は人麻呂の「現神思想の表現」と説き、

それは持統朝に対する人麻呂の危機感であった。(中略)持統王権が天武王権と同様に強力だとの認識からではなく、むしろその逆であってほしいという彼の期待と

願望をこめたものであった。(中略)それは彼がこの女帝の後宮で育てられた宮廷歌人だという個人的な動機からだけではなく、壬申の乱のような悲劇を繰返してほしくないための願いであった(注4)だろう。

とその理由を述べる。土橋説が持統王権が強力でなかったとする説は、『懐風藻』の「皇太后王公卿士を禁中に引きて、日嗣を立てむことを謀らす。時に群臣各私好を挟みて、衆議紛紜(注5)なり」との記事から納得できる。持統の面前での衆議でさえこのありさまである。このことは、皇族や公卿の中に、次の皇太子には軽皇子を期待し願う安定した支持基盤がなかったことと、持統王権が強力ではなかったことを裏付けている。また、日並皇子挽歌で長歌の六割近くを、高市皇子挽歌では長歌の三割以上を費やし、天武の神格化と正統性を詠い、壬申の乱の正当性を詠っていることから、土橋説はよくわかる。

土橋説と全く逆なのが、折口説である。折口信夫は、極つて製作を命ぜられる人が、飛鳥時代以後には、もう見え出したと思はれる。其作物は、群衆又は、一人の爲の代作。(中略)柿本人麻呂の日竝知皇子や、高知皇子尊を悼んだ歌の如きも、實は個性表現でなく、官人の群衆の爲の代作である(注6)。

と説く。別の論文でも

人麻呂が天武・持統両帝の皇子たちの舎人であつた證據として挙げられる三四種の歌などは、實は舎人等の合

唱すべき挽歌として、人麻呂が自身の内にはない空想から作り上げたものである。従つて實感なので(注7)ははずはない。と説く。「命ぜられ」「空想から作りあげた」代作説である。

天武と皇子を讚美したあとの後半の皇子への悲しみの表現をみると、確かに人麻呂の個人的な感情だろうかと思ひ、折口説もよくわかる。土橋が、「人麻呂の思想表現」の歌とする説に対し、折口は、「命ぜられ」て作らされた「個性表現」のない歌とする説である。しかし、挽歌の感情表現について、一致するところもある。その最大の一致点は、土橋が、「個人的な動機からだけではなく」、折口が「官人の群衆の爲」と説く点である。土橋は、別の論文では、「宮廷讚歌は」「大宮人全体を代表して歌われた(注8)」と想像している。両説とも大宮人の感情を背景にして詠っているとみる点では一致している。

この土橋説に近いのが、武田祐吉である。

その感情は、皇子にお仕へした舎人として自然のものであり、やゝ離れてこれを見れば、そこに奉仕した人々に代つて、歌つてゐるとも言へる。人麻呂自身の感情が中心にはなつてゐるけれども、自分が屬する團體の代表者としての意味があるやうに思はれる。そこにも人麻呂の歌が、國民の心だといふ意義が現れてゐるのである(注9)。

武田は「人麻呂自身の感情が中心」との説で、土橋の「人麻呂の思想表現」と共通している。武田の「國民の心」、土

橋の「大宮人」との捉え方もやや共通している。

折口説に近いのは土屋文明である。土屋文明は

人麿の舎人説について疑わしい點は、この歌についても高市皇子挽歌についても、その個人的感動の殆どのべられて居ないこと。(中略)若し何か人麿に作歌せしめた特別の事情が存したとすれば、それは人麿が作歌の練達者であるといふことが既に世に認められて居たためと見るべきではあるまいか。^(注10)

と説く。真淵の人麻呂舎人説に対し最初に異を唱えたのが折口^(注11)であり、土屋も舎人説を『萬葉集總釋』で否定している。折口の「實感のようはずはない」と、土屋の「個人的感動の殆どのべられて居ない」ことは共通している。折口の「命ぜられ」て作歌したとする説と、土屋の「作歌せしめた特別の事情」で作歌したとする説には共通性がある。

自己の感情表現であるか、否かについては、反する説が存在することを確認し、次に、共通点、集団の心も詠っている点のみていきたい。

二、どの集団の代表か

人麻呂は一体、どの集団を代表して詠っているのか。太田善麿は、「舎人でなければ歌えない歌を歌ったのだ」、また、舎人集団を背景にして人麻呂は詠っている^(注12)と説く。窪田空穂は、「皇子尊の舎人という立場に立ち」^(注13)、風巻景次郎は、「舎

人として代作してゐる」^(注14)、大久保正は、「彼自身舎人の一人として舎人全體の感動を代表して歌つてゐる」^(注15)と説く。四人が共通して、舎人の立場から、舎人集団を意識してと説いている。大久保だけが舎人を代表してと明言している。

齋藤茂吉は、「「皇子の宮人」を代表した心持で歌つてゐる」^(注16)と説く。宮人の中には当然舎人も含まれている。武田は、舎人集団、皇子の宮人を代表して、国民の心として、と広く捉えていたが、その中の「皇子の宮人」とで共通している。

佐佐木信綱は、「人麿は個人的感情をうたはず、國民的感情を代表する」^(注17)と説く。前者の「個人的感情をうたはず」は、折口・土屋に近く、後者の「國民的感情を代表」は武田に近い。

総じて、集団の感情を意識して、或いは代表して詠っているという点では共通しているが、どの集団を代表してかでは、説が別れている。要は、その集団の一人として、人麻呂が詠っているのが問題なのである。

三、2・20一短歌の「舎人はまとふ」について

人麻呂は、この「舎人」の中の一人として、自身を含め詠っているであろうか。

万葉集では「舎人」はどのように詠われているのであろうか。

3・四七五・・・白栲に舎人装ひて・・・
3・四七八・・・五月蠅なす騒く舎人は白栲に・・・

右の二首は、安積皇子の挽歌で、大伴家持の歌である。二首とも作者家持が、白装束に舎人が装っている様子を詠っている。

13・三三二四・・・うち日さす宮の舎人も・・・
13・三三二六・・・つかはしし舎人の子らは・・・

右の二首は、挽歌である。用例の四首がみな挽歌で長歌である。「三三二四」の挽歌は、高市皇子挽歌に似ている。この挽歌においても、作者が見た舎人の様子を詠っている。

「三三二六」の挽歌では、城上宮で召し使われた舎人が鳥の群れのように待っている様子が詠われている。

16・三七九一・・・さす竹の舎人壮士も・・・

これは長歌ではあるが、挽歌ではない。この歌でも作者が宮仕えの女や舎人の男の様子を詠っている。

万葉集に詠われている「舎人」は、どれも作者から見た様子が詠われており、その舎人の中に作者を含め詠われている例はない。

作者人麻呂は「舎人は」と、職名に係助詞「は」を付け用いているが、人麻呂作歌の中で、「人十は」の「は」はどのような役割果たしているのだろうか。

三六「大宮人は」↓「渡り」「渡る」

一三三「われは」↓「妹思ふ」

一六七「日の皇子は」↓「太敷きまして」

二〇一「舎人は」↓「まとふ」

二〇二「わご大君は」↓「高日知らしぬ」

二〇七「妹は」↓「過ぎて去にきと」

二一〇「妹は」↓「座すと」

二一一「妹は」↓「年さかる」

二一三「妹は」↓「座すと」

二一四「妹は」↓「年さかる」

二一七「夫の子は」↓「寝らむ」

二三五「大君は」↓「神にし座せば」

二四〇「わご大王は」↓「蓋にせり」

二四一「皇は」↓「神にし坐せば」

二五二「海女とか見らむ」↑「われを」

四二九「児らは」↓「霧なれや」

五〇一「思ひき」↑「われは」

三六〇六「廬す」↑「われは」

三六〇七「海人とや見らむ」↑「われを」

人麻呂作歌の「人十は」の使用例は、以上のとおり十九例である。この中から、三人称で作者人麻呂を含む可能性があるのは、「舎人」を除いて「大宮人は」だけである。

1・三六・・・百磯城の 大宮人は 船並めて 朝川

渡り 舟競ひ 夕河渡る

持統天皇の吉野行幸に、人麻呂も供奉して吉野にいたので

あるが、ここに詠っている「大宮人」の中に、人麻呂は自身を含めて詠っているのであるか。儀礼の歌だから、ほめ言葉を重ね続け、大宮人をほめる場面である。「朝川」と「夕河」を同時に詠っているところから、目の前の実景ではないであろう。人麻呂が前に目にした光景を基に虚構したものであろう。これは、人麻呂が目にした光景を虚飾し描写したものとと思われる。

人麻呂作歌には、「名詞十は」の文節が述べ五一例ある。共通しているのは、「は」の上の名詞を「は」の下で説明していることである。その内二つの例をみると

1・一三三 小竹の葉はみ山もさやに乱げどもわれは妹
思ふ別れ来ぬれば

「小竹の葉は」どうしているかといえ、
「山にみち、ざわざわ音をたてているよ」。

2・一九四 ……生ふる玉藻は 下つ瀬に 流れ触らばふ

「玉藻は」どうしているかといえ、
「流れ触れ合っているよ」と説明している。

さて、本題の左記の短歌であるが、

2・二〇一 埴安の池の堤の隠沼の行方を知らに舎人は
まとふ

この短歌の「舎人はまとふ」の場合も、「は」の上の「舎人」を下で説明しているのである。短歌であるから、描写し

ているといえよう。

この短歌だけで見れば、「舎人は」(主語) + 「まとふ」(述語) という、ごく単純な主語述語関係にある。「舎人は」どうしているのかといえ、
「まとふ」ているよ、と説明しているのである。「埴安の池の堤の隠沼の行方を知らに」は形式的であるが、「舎人はまとふ」の中に人麻呂は主観的感情を容れ、舎人の様子を詠っているのである。人麻呂が感情移入をしていることと、作者人麻呂自身をも含めているということは違う。それ故に、「舎人」の中に作者人麻呂を含まないと思われる。

近時の注釈書類で、作者人麻呂を含むと解するものに、井上『萬葉集新考』、山田『萬葉集講義』、菊池『萬葉集精考』、金子『萬葉集評釈』、武田『増訂萬葉集全註釋』、澤瀉『萬葉集注釋』がある。

他方、作者人麻呂を含まないと解するものに、次田潤『改修萬葉集新講』、齋藤『柿本人麿評釋篇』、佐佐木『評釋萬葉集』、土屋『萬葉集私注』、次田真幸『萬葉集講説』、『日本古典文學大系』、『日本古典文學全集』、桜井『現代語訳対照萬葉集』、『新潮日本古典集成』、中西『萬葉集全訳注原文付』、『新編日本古典文學全集』、『萬葉集全注』、『新日本古典文學大系』、『萬葉集釋注』、『和歌文學大系』、中西『傍注万葉秀歌選』、阿蘇『萬葉集全歌講義』がある。

挽歌から帰納して、人麻呂が舎人であったのか、舎人では

なかったのか、その最大の根拠ともいふべき、「舎人はまどふ」の解釈でも説が分かれている。

また、この「2・201」短歌について、『柿本人麻呂論考増補改訂版』は、次のように説いている。

長歌一九九においては、さきにもたように舎人たちは御門の人の中に含められて一点景をなしていたし、反歌のもう一首「日月も知らず恋ひ渡るかも」が「われわれ」の気持をうたっているにしても、それは宮廷人一般に拡がるべきで、舎人たちという狭い限定はもっていない筈である。その意味で、やはりこの二〇一の歌は、葬りの宮における純然たる一点景でしかないということができよう。(中略) 人麻呂が舎人であったか否か、たしかなことはもはや知る由はないとしても。(中略) 舎人のさまを叙述しているから、作者が舎人であったということにはなお一層ならないのである。^(注18)

「一点景」とみるのが最も射た解釈と思われる。それで十分である。

四、壬申の乱と人麻呂

壬申の乱の詠い方から、人麻呂も従軍したのではないかとする説がある。

吉村貞司は「人麻呂はこの高市皇子の舎人であったのではないか。壬申の戦況をかくも力をこめて歌った彼は、或ひは

従軍してゐたのかもしれない^(注19)という。しかし、民直大火をはじめ、乱の生存者が何人もおり、乱の話は聞かされていたであろうから、戦況を力をこめて詠っていることをもって、人麻呂が従軍していたとはいききれないであろう。

北山茂夫は、大伴吹負の下で南大和で参戦したと想像している。人麻呂が壬申の乱に参加したか否かの資料は万葉集のこの挽歌だけである。この挽歌からは、参戦した、参戦しなかったとの決め手を見つけることはできない。また、仮に人麻呂が参戦していたとしても、それをもって舎人とするのは、大伴吹負の例からも無理であろう。

壬申の乱と人麻呂との関連にふれ、高木市之助は、

人麿は舎人であった。人麿の代表作である、「高市皇子尊城上殯宮之時」の挽歌の短歌一首に、

埴安乃 池之堤之 隠沼乃 去方乎不知 舎人者迷惑

(万葉、卷二一—二〇一)

とある限り、これは事実である。^(注21)

と人麻呂舎人を力説する。しかし、この短歌の場面は「一点景」であり、これをもって、舎人であるとか、舎人でないとかは、いえないのではないだろうか。

その後、高木は、「古代文藝と社会」において、「舎人意識^(注22)」論を提唱した。しかし、これは、高木本人がいうように、「制度としての舎人」ではない。一種の精神論である。

乱を詠ったわけと舎人説について、西郷信綱は、

すくなくも高市皇子を悲しむにあたり、皇子とふかい人格的結合関係をもち、また壬申の乱をその配下でたたかいたぬいてきた舍人集団の場が、その死を公的に悲しむのに一ばんふさわしいものであったのは確かで、作者が熱っぽく皇子の行動を叙事詩的にうたえたわけもそこにあるといえよう。力強いうたいかたをしているので作者人麿も舍人であつたのだらうとというような意見もとび出す始末だが、それはちょっとありそうもないことである。やはり作者は公の儀式上の存在である宮廷詩人として自己を移入させてよんでいる^(注23)と思う。

と説く。「その死を公的に悲しむのに一ばんふさわしい」と説くには説得力がある。皇子の功績を称えながら、その死を共に悲しむのに壬申の乱は最適な内容であつたからである。西郷が説くように、「力強いうたいかたをしている」から、舍人とするには無理があるだらう。

五、皇子たちと人麻呂

そこで、視点を変え、人麻呂と皇子たちとの関係をみてみたい。

樋口功は、「草壁皇子にも高市皇子にも一定の官職で仕へたのではなく、歌人として出入りしてゐたといふぐらゐること^(注24)かも知れぬ。」と説く。ただ、根拠を示していない。

屋敷頼雄は、宮廷関係歌と系図から

人麻呂歌關係の皇子女が、以上の如く殆ど三母系の近親間に極限されてをると云ふことは、此の三母系を結ぶ忍壁中心の姻戚關係に由因すると看做すべく、(中略)人麻呂は、忍壁とは餘程密接な關係に有つたものと爲ねばならぬ。(中略)彼が或特定の皇子に隸屬した舍人、即帳内であつたと推論する證據は未だ無い^(注25)。

と推定した。森本治吉は、「中央官時代の或る時期を忍壁皇子の官人として仕へてゐた^(注26)」と説く。森本は人麻呂が忍壁皇子に歌を献上していることと、9・一六八二「とこしへに夏冬行けや」の歌などを根拠にしている。橋本達雄は諸皇子とのかかわり方から、特定の皇子の舍人ではなかつたとの説である。阿蘇瑞枝は、「天武紀における忍壁皇子關係の記事」、「忍壁皇子に対するもの」が「非略体歌群の中でも初期のもの」から、「すくなくとも持統五年以前から人麻呂は忍壁皇子とかなりのかかわりを有し」たことなどから、忍壁皇子に家從位で近侍したと推論している^(注28)。

五人は共通して、人麻呂と皇子たちとの結びつきから特定の皇子の舍人ではなかつたと推論している。このことから、人麻呂が舍人であつた、と決めることはできない。

まとめ

以上、人麻呂を舍人と帰納できるか、人麻呂の挽歌や皇子との関係を検証してきたが、人麻呂が舍人であつたことは実

証できない。このことから、『萬葉代匠記』〔精〕が日並皇子挽歌で「舍人ニテヨマレタルニハアラス」と説いたこと、折口信夫が舍人説を「想像」と解したことが妥当である、と言えよう。

【注】

注1 中西進『萬葉集全訳注原文付』（昭和五九年・講談社）による。本稿の万葉集の本文等は、全て本著による。

注2 『萬葉考二』（『賀茂真淵全集第一巻』昭和五二年・続群書類従完成会・一四〇頁）

注3 ◎江戸時代から昭和四〇年までの舍人説には左記のものがある。

江戸以前の偽書・『人丸秘密抄』「柿下人丸 春宮大夫の化人也。世に用る人丸、是なり」（『京都大学蔵大惣本秘書集成第十巻』平成七年・臨川書店・一九八頁）、一樂軒栄治『柿本人麿之事』（『人丸秘密抄』引用）、橋千蔭『萬葉集略解』（『萬葉考』）、上田秋成『歌聖伝』（真淵の説に）『金沙』（「まとふ舍人。即朝臣の自身也）、岸本由流『萬葉集攷證』（萬葉考別記）、鹿持雅澄『萬葉集古義』（岡部氏考別記）、岡熊臣『姊本人麻呂事蹟考辨』（考同卷二）、橘守部『萬葉集墨繩』（考注別記）『萬葉集檜婦手』（考ノ別記）、安藤野雁『萬葉集新考』（萬葉考に）、近藤芳樹『萬葉集註疏』（萬葉考別記）、岡田正美「柿本朝臣人麿事蹟考」（十二見た内の一）に、萬葉考別記）、塚越芳太郎『柿本人麿及其時代』（「皇子の舍人となりたると假想）、關谷真可彌『人麿考』（考ノ別記）、尾山篤二郎『柿本人麿』（懸居翁の説）、久松潜一『萬

葉集の新研究』（「或るは舍人であつたらうかとも推せられる。『万葉秀歌』では、1・二九、宮廷詩人か民間詩人）、井上通泰『萬葉集新考』（2・二〇一、「作者も舍人の一人」）、山田孝雄『萬葉集講義』（2・二〇一、「われら一同に途方にくれてあるよ」）、武田祐吉『萬葉集新解』（2・二〇一、「人麻呂も舍人の一人」）。『萬葉集總釋』では宮廷歌人説、『柿本人麻呂その傳記その作品』では「宮廷歌人とも呼ばれてゐる」といい、舍人説、『國文學研究姊本人麻呂』では舍人説）、菊池壽人『萬葉集精考』（「さうかも知れねど確かではない」）、木村正辭『萬葉集美夫君志』（2・一六七、「皇子の宮人」を萬葉考を根拠に舍人と解している）、金子元臣『萬葉集評釈』（1・二九、「はじめ春宮舍人として草壁、高市の諸皇子に）、齋藤茂吉『柿本人麿總論篇』（「宮廷詩人などとせず、舍人ぐらゐの儘で）、高木市之助「吉野の鮎」（「歌人は舍人柿本人麿」）、吉村貞司『人麻呂抄』（「人麻呂はこの高市皇子の舍人であつたのではないか」）。以上戦前。以下、戦後。五味智英『古代和歌』（東宮の舍人だつたらしく）、難波喜造「柿本人麿」（「天皇・皇子たちの側近に親しく仕える舍人）、風景次郎「萬葉集と歌風の變遷」（「舍人たちの一人であつた）、藤原正義「柿本人麿論」（「舍人人麿」「舍人歌人」）、澤瀉久孝「萬葉集注釈」（2・二〇一、「作者もその一人として）、窪田空穂『萬葉集評釋』（戦後の新版、2・二〇〇、「純粹に舍人としていつてゐる」）、次田真幸『萬葉集講説』（2・二〇一、「舍人として宮廷に仕えた」）、神田秀夫『人麻呂歌集と人麻呂伝』（「人麻呂が高市皇子に仕へる舍人だつた」）。

◎江戸時代から昭和四〇年までの舍人否定説には左記のものがある。

- 折口信夫「萬葉集のなり立ち」(「單なる想像」、屋敷頼雄「柿本人麻呂覺書―萬葉集歌人考其十二」(殆ど妄斷に幾い)、土屋文明『萬葉集總釋』(1・一六七、舎人の一人であった爲と言はれて居るがたしかではない。)、森本治吉『萬葉美の展開』(一つの臆測説に過ぎない)、橋本達雄「人麻呂と持統朝」(特定の皇子の舎人であったとは考えにくく)、西郷信綱「柿本人麿」(実際に彼が舎人であったことを指示するわけではあるまい)、山本健吉『柿本人麻呂』(想像説)。
- 注4 土橋寛『万葉開眼(上)』(昭和五五年第五刷・日本放送出版協会・一四八―一五〇頁)
- 注5 『懷風藻』(『日本古典文学大系69』昭和四八年・岩波書店・八一頁)
- 注6 『折口信夫全集第一巻』(昭和四〇年・中央公論社・三六三―三六四頁)
- 注7 (注6) 四四一―四四二頁
- 注8 土橋寛『萬葉集の文学と歴史』(昭和六三年・塙書房・一〇二頁)
- 注9 武田祐吉『柿本人麻呂』(昭和十五年・厚生閣・一一六―一七頁)
- 注10 土屋文明『萬葉集私注一新訂版』(昭和五一年・筑摩書房・二七五・二七七頁)
- 注11 (注6) 三六四頁。「單なる想像に過ぎなかつた」。なお、折口は、大正九年「萬葉集私論」において「宮廷詩人」説を提唱し、長谷川如是閑が昭和八年「御用詩人柿本人麿」(『短歌研究』昭和八年三月号・七六頁)において、宮廷歌人と改称している。
- 注12 太田善麿『古代日本文学思潮論(IV)』昭和四六年再版・桜
- 注13 楓社・一九九頁)
- 注14 窪田空穂『萬葉集評釋第一巻』(昭和五九年新訂初版・東京堂出版・四一八頁)
- 注15 風巻景次郎「萬葉集と歌風の變遷」(『萬葉集大成第一巻』昭和二八年・平凡社・二四二頁)
- 注16 大久保正『萬葉の傳統』(昭和三二年・塙書房・三八頁)
- 注17 齋藤茂吉『柿本人麿二評釋篇』(『齋藤茂吉全集第十六巻』昭和四九年・岩波書店・五八五頁)
- 注18 佐佐木信綱『評釋萬葉集卷一』(昭和二三年・六興出版部・四一頁)
- 注19 『柿本人麻呂論考増補改訂版』(昭和四七年・平成十年増補改訂版・おうふう・二六〇―二六二頁)
- 注20 吉村貞司『人麻呂抄』(二〇〇四年・クレス出版・二二九頁)
- 注21 北山茂夫『柿本人麻呂論』(一九八三年・岩波書店・二八七―二八八頁)
- 注22 「舎人人麿」(『高木市之助全集第三巻』昭和五一年・講談社・四頁)
- 注23 『高木市之助全集第六巻』(昭和五一年・講談社・二二一―二二二頁)
- 注24 西郷信綱『萬葉私記』(一九八〇年第七刷・未来社・二六二頁)
- 注25 樋口功『人麿と其歌』(大正十四年・有朋堂發行・五〇頁)
- 注26 屋敷頼雄「柿本人麻呂覺書 萬葉集歌人考其十二」(昭和六年・四月・つばさ発 行所・一二五―一二六頁)
- 注27 森本治吉『人麿の世界』(昭和一九年・昭森社・一一三頁)
- 注28 橋本達雄「人麻呂と持統朝」(『文藝と批評』第三号・文芸と批評同人・六頁)

注28 (注17所収、「柿本人麻呂と忍壁皇子」)

本稿を成すにあたり懇切な御教示をいただいた曰吉盛幸先生に心より感謝申し上げます。また、御教示いただいたにも拘わらず十分に生かされず、心よりお詫び申し上げます。